

幼稚園教育実習における学習内容について ——自己評価の具体的内容から学生の学びを検討する——

野尻裕子*・栗原泰子**

Research on the Contents of Study in Kindergarten Practice Teaching From Analysis of the Contents a Student's Self-valuation

Yuko NOJIRI and Yasuko KURIHARA

要 旨

教員養成には不可欠といえる教育実習は、理論と実践の統合を学習する唯一の機会である。そのため本研究では実習を通して、学生自身が自らの実践を高く評価する項目と、現場からの指導内容を照らし合わせて関連性を検討することにより、今後の学生の学習の方向性を探ろうと考えた。

その結果、自己評価の「(1) 幼児の理解」に関しては、「個々の幼児及びクラスの特徴を捉えること」に自己評価が高いが、「(2) 指導の実際」については評価が低いという現状が明らかになった。更に「(3) 指導計画の立案」では、幼児の実態の把握に困難を示す様子が見取れる。また実習のメインともいえる「(4) 指導の実際」(責任実習)においては、指導計画との関連で実際の幼児の実情に合わせて指導が行えたというプラスの評価をするものは少ない。しかしその一方で、細部(個々の子どもへの配慮、声の大きさ、安全への配慮)の評価は高い。この結果から相互の学習内容を関連付けていくことが課題として示された。

また実習で学んだことについて、幼稚園側から受けた指導内容に着目してみると、その半数以上が保育者として備えているべき基礎的資質に言及するものが多い。「(幼児に関すること)」、「幼稚園教員に関すること」これらの現状から、本学においては保育者として必要な能力の枠組みを設定し、経験の異なる個々の学生に対する個別指導、保育者役割の再確認を徹底する必要があると考える。

キーワード：教員養成，教育実習，自己評価，幼児の理解，指導内容

*講師 幼児教育学

**教授 幼児教育学

【はじめに】

教員養成における教育課程の中で、教育実習は理論と実践の統合という意味において重要であることに異論はないだろう。幼稚園教育実習を通して特に学生の成長を期待する点は、幼児の活動実態を把握しながら幼児及び教職理解を深めてほしいということである。そのためにも学生が実習経験の中でよくできたこととして高く評価していることは何か、更に実習園からの指導内容を明確にすることは、今後必要な学習の方向を見いだすためにも重要であると考えられる。

【研究目的】

本研究においては、学生による幼稚園教育実習に関する自己評価から、学生が実習において何を学び得たのかを明らかにするとともに、幼稚園教員養成に関する示唆を得ることを目的とする。

【研究方法】

4年次の教育実習終了後に質問紙調査を実施した。

対象学生…… K女子大学2000年度4年生49名

評価項目……(1) 幼児の理解について

(2) 指導の理解について

(3) 指導計画の立案について

(4) 指導の実際について

以上の4項目については5段階評定法

(5：十分うまくできた，4：うまくできた，3：どちらともいえない，2：あまりうまくできなかった，1：まったくうまくできなかった)

(5) 実習で学んだこと

この項目については「よくできたこと」「失敗したこと」に分けて自由記述で回答を求めた。

分析方法……(1)～(4)まではそれぞれの下位項目ごとに評定値ごとの人数及び平均値を算出して、全体の傾向を明らかにする。

(5)に関しては、自由記述の内容を学生の関心の方向から近藤・栗原(1987)の分類(幼児に関すること・保育に関すること・幼稚園教員に関すること・自

己に関すること)に基づき分析を行った。

【結 果】

1. 幼児の理解について

この項目では、「①個々の幼児の特徴をとらえることができた」「②幼児のグループの特徴をとらえることができた」「③クラスの特徴をとらえることができた」の3つの下位項目を設定し、自己評価を行った。結果は以下の通りである(表1参照)。

表1 幼児の理解について(評定値別人数・割合・平均値)

評価の視点	5	4	3	2	1	平均値
①個々の幼児の特徴をとらえることができた	3 (6.1)	33 (67.3)	9 (18.4)	4 (12.2)	—	3.71
②幼児のグループの特徴をとらえることができた	1 (2.0)	28 (57.1)	14 (28.5)	6 (12.2)	—	3.48
③クラスの特徴をとらえることができた	4 (8.2)	33 (67.3)	10 (20.4)	—	2 (4.1)	3.73

(上段：人数，下段：割合(％))

平均値をみると、①の個々の幼児の特徴と、③のクラスの特徴については、同じ程度にとらえることができたという評価となっている。それに比べて②のグループの特徴をとらえることに関する評定値の平均が低くなっている。これは、評価にあたって、評定尺度3の「どちらともいえない」とした学生が全体の28.5%いることが大きく影響している。その原因として、配当クラスが年少であった場合には、まだ遊びがグループで展開されるまでに至っていないことが考えられる。また行事などの関係で自由に遊ぶ時間が少なく、自発的な遊びのグループが発生しなかったことも考えられるが、学生の意識の中で、幼児が自由に遊んでいる場面は、いわゆる「遊び時間」というような意識がはたらき、そこでの指導は必要ないような意識が生じたためにこのような結果になったとも考えられる。幼稚園教諭が何気なく幼児たちとともに遊び、その中で幼児個々に対する指導を行っていることが読みとり切れなかったとすれば、幼児理解についてもっと指導すべき課題がここから読みとれる。

保育を行うに当たっては、幼児を理解することがそのスタートとなるものであり、学生個々が自分なりに幼児を理解するための観察の視点を立てたり、記録の取り方を工夫するなど遊び

のグループによる幼児理解を深めるための何らかの示唆を学生に与える必要性を感じる。

2. 指導の理解について

幼稚園における指導は、教材や言語による提示が少なく、どちらかというところ、幼児の発想や活動に教師が寄り添い、そこから個々の幼児に対する援助が行われる形をとることが多いため、なかなかその意図が学生に伝わりにくいものとなっている。

ここでの指導の理解についても、学生はクラスを対象とした一斉保育形態の指導についての理解はある程度できたと思われる（表2参照）。しかし、この評価項目の中の「流れの中で教師の意図を理解する」という項目が、他の2つの項目に比べて低くなっている。これは、保育を一連の流れとしてとらえるという視点がまだ不十分であることに起因していると思われる。

表2 指導の理解について（評定値別人数・割合・平均値）

	5	4	3	2	1	平均値
①教師の指導の意図を的確にとらえることができた	1 (2.0)	23 (46.9)	22 (4.9)	3 (6.1)	—	3.44
②月・週・日の流れの中で指導の意図をとらえられた	—	20 (10.8)	27 (55.1)	2 (4.1)	—	3.46
③活動に応じた教師の援助の手だてをとらえられた	3 (6.1)	26 (53.1)	16 (32.7)	2 (4.1)	—	3.49

（上段：人数，下段：割合（%））

保育の一連の流れは、前述したように幼児を理解することでスタートし、幼児一人ひとりについての教師のねがいをもって援助をすることで保育が展開していく。一見意図的なものが読みとれない場合でも、教師は幼児個々に対する課題をもって、意図的な指導を行っている場合もある。保育を一連の流れとして位置づけ、その中に幼児個々への対応をしていくということは、経験を積んでいくことで身につくものであろうが、教育実習において、教師が何らかの意図をもって幼児と接しているということを前提に保育を見ることで、みえてくるものもあると思われる。幼稚園における教育では幼児一人ひとりに対応することがその基本となっているとともに、そこでの生活は幼児が主体的に遊びの中から学ぶということが前提となっている。そのことから考えると、その多様さの中での指導は理解しづらいものであろうが、視点の置き方などを提示することによって、ある程度理解することが可能になると思われる。

3. 指導計画の立案について

表3 指導計画の立案について（評定値別人数・割合・平均値）

	5	4	3	2	1	平均値
①立案の背景になる幼児の把握が的確にできた	1 (2.0)	14 (28.6)	24 (49.0)	11 (22.4)	—	3.16
②ねらい、題材の設定が適正であった	—	21 (42.9)	21 (42.9)	8 (16.3)	—	3.32
③主活動の設定が適正であった	2 (4.1)	12 (24.9)	28 (57.1)	7 (14.3)	—	3.18
④環境設定への配慮が適正であった	1 (2.0)	16 (32.7)	18 (36.7)	15 (30.6)	—	3.12
⑤評価の観点が適正であった	—	11 (22.4)	32 (65.3)	5 (10.2)	—	3.06

（上段：人数，下段：割合（％））

指導計画の立案については、どの学生も苦勞したようである。①の「立案の背景になる幼児の実態の把握が的確にできた」という、保育を考える上でのスタートとなる項目について、半数の学生が「どちらともいえない」という評定を行っていた。また、②の「ねらい、題材の設定が適正であった」では、評定値が4と3に集中していた。また③の「主活動の設定が適正であったか」という項目では、6割近くの学生が3の評定となっている。指導計画を立案する際に、学生は、自分が指導するであろう場面のみをイメージしやすく、前後の関連や幼児同士の関係性などよりは、自分自身の保育にその意識が集中しやすく、そのため、このような指導計画に関する評定となったと思われる。そして、環境設定や評価など、直接自分の保育に関係のない項目になると、マイナスの評価あるいは「どちらともいえない」という評価に偏る傾向が見られた。

指導計画は、計画だけを考えて作成すればよいというものではない。子どもと一緒に活動を進めていくことを前提として、ねらいを立て、そのねらいを達成するために内容を考えていくという作業が必要となってくる。そこで必要となるのは、分析的に考えることと、総合的に考えることという2つの方向性をもった思考力である。さらに、幼児個々への配慮も必要となってくる。このあたりの相反する思考力をどのように養成していったらよいかは課題となるであろう。

4. 指導の実際について

表4 指導の実際について（評定値別人数・割合・平均値）

	5	4	3	2	1	平均値
①子どもの実情に合わせて計画を遂行できた	1 (2.0)	18 (36.7)	22 (44.9)	9 (18.4)	—	3.29
②子どもの実情に合わせてねらいを達成できた	—	24 (49.0)	21 (42.9)	4 (8.4)	—	3.41
③公正な態度で子どもに接することができた	16 (32.2)	26 (53.1)	6 (12.2)	1 (2.0)	—	4.16
④個々の子どもへの配慮ができた	6 (12.2)	24 (49.0)	15 (30.6)	3 (6.1)	—	3.61
⑤子どもにわかるようなことばや声の大きさだった	8 (16.3)	22 (44.9)	13 (26.5)	6 (12.2)	—	3.65
⑥活動の場面で、それぞれ安全について配慮できた	6 (12.2)	22 (44.9)	18 (36.7)	3 (6.1)	—	3.63

(上段：人数，下段：割合（％）)

指導の実際の中で学生が一番よくできたと評価しているのは「③公正な態度で子どもに接することができた」という項目であった。これはクラス平均で4.16と今回の調査項目の中で一番高い平均値であった。これは幼児と実際に接する中で、実感として学生が体験したものと考えられる。これに対して「①子どもの実情に合わせて計画を実行できた」「②子どもの実情に合わせてねらいを達成できた」というように、指導計画との関連で自分の指導の実際を振り返った場合に、その評定平均値は他の項目に比べて低くなっている。これは、事前に立案した指導計画と自分自身の保育とを関連づけて反省するという思考を行っていることからこのような結果になったと思われる。自分がやろうと思った通りに保育はうまく運ばなかった、あるいは幼児があまり楽しそうではなかった、それは指導計画の立案に問題があったのではないかという反省的な思考がそこで行われているからではないだろうか。

この指導の実際においては、評定値に5をつけている学生が多く見られるのも、他の調査項目にはない特徴である。④の「個々の子どもへの配慮ができた」「⑤子どもにわかるようなことばや声の大きさだった」「⑥活動の場面で、それぞれ安全について配慮できた」の3つの項目は1割以上の学生が「十分うまくできた」としており、評定値4を合わせると、6割以上の学生がプラスの評定を行っている。

幼稚園教育実習における学習内容について

保育の一連の流れ、つまり、幼児理解、教材研究、指導計画の立案、指導の実際、評価という中で保育を考えていくことが必要であるが、学生は部分的な面に意識を向けがちである。それらの関連性をどのように意識化させていったらよいか今後の課題となるであろう。

5. 実習で学んだこと

(1) 自己評価の高い内容

学生自身が高い評価をしているものは73件挙げられた。具体的には「幼児に関すること」が全体の43%、「保育に関すること」が56.2%であった（複数回答）。

表5 自己評価の高い内容
(幼児に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①楽しく遊ぶこと	7 (21.9)
②一人ひとりの理解	6 (18.8)
③援助—適切な言葉がけ	5 (15.7)
④笑顔で接すること	4 (12.5)
⑤援助—適切な対応	4 (12.5)
⑥積極的なかわり	2 (6.2)
⑦信頼関係の構築	2 (6.2)
⑧その他	2 (6.2)
計	32 (100.0)

「幼児に関すること」では、幼児とのかかわりに関することととらえ、一人ひとりの幼児と気持ちのつながりをもつことができたことを実感したことや、対応が円滑に幼児に行えたといった内容のものを含めることとした。具体的な内容では、適切なことばがけや対応を高く評価しており、幼児理解の第一歩として共にすごすこと、一人ひとりの幼児を大切にすることの重要性を学んだといえるだろう。また実習に臨むにあたり、子どもとのかかわりに不安を訴える学生が少なくない中で、こうした結果はさらに教職志向を強めることにつながると考えられる。

表6 自己評価の高い内容
(保育に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①手遊び	9 (22.0)
②紙芝居	6 (14.6)
③絵本	6 (14.6)
④製作活動	6 (14.6)
⑤ピアノ	3 (7.3)
⑥歌	2 (4.9)
⑦ペープサート	2 (4.9)
⑧エプロンシアター	2 (4.9)
⑨パネルシアター	2 (4.9)
⑩その他	3 (7.3)
計	41 (100.0)

「保育に関すること」では、手遊びや紙芝居、絵本のよみきかせなど、活動そのものが完結性のあるもので成果を発揮できたとしている。こうした保育技術は事前の準備を入念に行うことの必要性を自覚していたことの結果といえるだろう。しかし1日実習の主活動に関する回答が少ないことを考えると、1日の保育の流れの中で個々の活動を計画すると行った点においては見通しが上手く立てられていないといえる。このことは、前述の4. 保育の実際における自己評価の評定にも現れている。ここでも1日の保育の流れを念頭においた事前指導の必要性が伺える。

(2) 自己評価の低い内容

学生自身が失敗したと評価した65件の内容を分類すると、「保育に関すること」が58.5%、つづいて「幼児に関すること」26.2%、「自己に関すること」が15.4%となっている(複数回答)。

幼稚園教育実習における学習内容について

表7 自己評価の低い内容
(保育に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①時間配分	11 (28.9)
②説明の方法	11 (28.9)
③準備, 練習不足	7 (18.5)
④声の出し方	6 (15.8)
⑤教材選択	3 (7.9)
計	38 (100.0)

一番多く回答があった「保育に関すること」では、説明方法や練習不足など、そのほとんどが教材研究の不足が原因であったことがわかる。事前に教材研究の重要性を理解できるような指導をさらに検討し、その具体的な方法、幼児の実態との関連からの教材研究の仕方などについて学生個々の個性や能力に合わせた指導が必要になると思われる。このことについては、事例をあげながら詳しいチェック項目を作成し、より具体的なイメージ作りが可能になるようにしていく必要がある。

表8 自己評価の低い内容
(幼児に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①援助—適切な言葉かけ	7 (41.2)
②一人ひとりの理解	4 (23.5)
③臨機応変な対応	3 (17.6)
④援助—適切な対応	2 (11.8)
⑤笑顔で接する	1 (5.9)
計	17 (100.0)

「幼児に関すること」では、さまざまな場面で適切な言葉かけや対応、援助ができなかったというものが多く、自己評価が高い内容と同一項目が挙げられている点が興味深い。目の前で繰り広げられる待たなしの状況にどのように対応してよいか困難を感じている学生が少なくないことがこの結果から明らかである。学生は保育の場で幼児一人ひとりが異なる育ちをして

いることや経験を積んでいることを体感し、そしてその幼児たちへ保育者がどのようにかかわるかは、知識や技術と人間的理解の相互作用によってもたらされるものであることを実践の場から学びはじめるといえる。

幼児を理解することから保育はスタートする。したがって、学生は実習前のいろいろな機会に幼児と接する機会を多く持つことで、幼児への対応の仕方を学ぶことができると思われる。

表9 自己評価の低い内容
(自己に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①周囲への配慮	7 (70.0)
②健康管理	1 (10.0)
③日誌の誤字脱字	1 (10.0)
④その他	1 (10.0)
計	10 (100.0)

「自己に関すること」では、周囲への配慮が足りなかったことを挙げている。特に実習後半は自分が配当されたクラスにとどまらず、園全体の運営に関する学習をする機会を与えられるが、どれだけ自分から積極的に動くことができたか、また冷静に状況を見ながら必要な動きができたかという点が大切であるということがこの結果から明らかである。実習も後半になると、責任実習の機会が増え、また疲労も蓄積し、実習日誌や指導計画など机上で行わなければならないことも多く、なかなか周りに目が届きづらくなる頃である。実習が終了したという時点での回答ということで、客観的に自分自身をみつめてこのような反省となったと考えられる。

幼稚園教育実習における学習内容について

(3) 幼稚園からの指導内容

表10 実習園からの指導内容
(幼児に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①個人差の把握	17 (54.8)
②一人ひとりと向き合う(理解)	11 (35.5)
③見守る	2 (11.8)
④その他	1 (5.9)
計	31 (100.0)

表11 実習園からの指導内容
(保育に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①基本的保育技術の未習得	10 (35.7)
②指導計画の不備	7 (25.0)
③準備不足	6 (18.5)
④保育の流れの把握不足	4 (14.3)
⑤その他	1 (3.6)
計	28 (100.0)

表12 実習園からの指導内容
(幼稚園教員に関すること)

具体的内容	件数 (%)
①前向きな姿勢の大切さ	4 (23.5)
②見通しをもった行動	4 (23.5)
③表現方法の工夫	3 (17.6)
④責任感	2 (11.8)
⑤自信	2 (11.8)
⑥その他	2 (11.8)
計	17 (100.0)

実習中に園側から受けた指導として挙げられたものは全部で76件あり、それぞれの学生の性格や技術の熟達度などが異なるため内容も多岐にわたっていた。これらの回答を分類すると「幼児に関すること」「幼稚園教員に関すること」「保育に関すること」の3つに分類することができた。幼稚園教諭を志向するものとして、学生を受け入れている実習園からすれば、「幼児に関すること」と「幼稚園教員に関すること」は、保育者として備えているべき基本的な資質であり、姿勢であるが、この2つに該当すると思われる指導が、全体の63.2% (48件)であった。具体的には「幼児に関すること」は、「幼児一人ひとりと向き合う」「幼児を見守る」また「個人差を把握する」というように保育観・幼児観についての指導が多く見られた。

また、「幼稚園教員に関すること」では、「前向きな姿勢の大切さ」「見通しをもって行動する」など日常の保育に臨む際の心構えに対する内容が多い。

「保育に関すること」は部分、1日実習といった実際の保育の中での指導内容で、保育技術についての指導である。これらの内容は、「①基本的保育技術の未習得」「②指導計画の不備」「③準備不足」「④保育の流れの把握不足」「⑤その他」としてまとめることができる。具体的にみると、「①基本的保育技術の未習得」では、特に声の出し方に関する指導が多く、子どもたちが聞き取りやすい声の大きさ、抑揚、スピードといったものを、日常から気遣う必要性を再確認する結果であった。その他では、ピアノ技術、手遊びのレパートリー不足などが挙げられている。「②指導計画の不備」では、ねらいの立て方や時間配分が適切ではないとする内容であった。「③準備不足」では、主に製作の準備の重要性や説明の仕方の工夫に欠けるなどがあげられていた。事前指導では指導計画作成の学習を行うと、主活動に製作を選択する学生が多いというのが従来の傾向であった。学生にとって製作活動は作品ができあがるという点で、活動の結果が目に見える形で残る物であるため、「活動した」という体験が表面的には整っているように受け止められやすい。ただし子どもの発達段階や興味の所在など、個々の子どもの多様性を抱え1つのものを作り上げていくということは考える以上に難しい活動である。学生の中には、子どもとともに製作するという活動は、材料を準備し、製作の仕方を説明し、子どもとともに製作をするという流れができており、失敗することの少ないことのような意識があったのであろう。しかし、幼児個々の能力や発達の差、作業のスピードや興味の持ち方など、実際に指導をしてみて、計画通りにいかないということが実感として体験されたものと思われる。事前の入念なシュミレーションを行い、あらゆる可能性を考慮して保育にあたらなければならないということを、学生が実感できるような授業内容が必要だといえる。「④保育の流れの把握不足」では、自分が立案した指導計画にとらわれすぎたり、導入に工夫がみられず主活動にスムーズに進めなかったというものだった。保育経験のない学生にとってこうした課題は、的確な状況判断力を十分に養う時間を事前指導の中でもたなければならないことを意味していると考えられる。

【まとめ】

5段階評定で行った、学生の自己評価は、「幼児の理解」「指導の理解」「指導計画の立案」「指導の実際」という4つの大きな項目で行ってもらったものである。この中で一番低かったのは「指導計画の立案」であった。指導計画はそこにいろいろなことを盛り込まなければならない

ない、思考力を必要とする作業である。幼児の姿やねらい、内容、そして保育の展開や環境の設定、幼児の姿を予想し、その予想された幼児の姿に対応した保育者の援助や環境の構成を考えていく。それを文字に表現していくということは学生にとって相当に労力を要するものであり、また能力も必要となってくる。また、幼児の理解や指導の実際は、自分が実際に保育をすることで、楽しい体験とつながりやすく、学生自身もあまり失敗観を感じないために、プラスの評価となったと考えられる。これらのプラスの評価をよりのばし、また、マイナスの評価になりがちな項目についての指導を行っていくことが大切であろう。

自由記述においては、自己評価の高い内容、低い内容において、「幼児に関すること」の内容が重複していた。また幼稚園からの指導内容の半数以上を占めた「幼児に関すること」「幼稚園教員に関すること」の具体的内容をもみてもこれらと共通する問題があるといえる。VTRなどの教材をもちいて少人数で様々な意見を交わす中で幼児理解を深めるディスカッション形式の授業が効果的になるのではないかと思われる。

【今後の学習課題について】

今回の調査では、学生の考える力をどのように育てていったらよいのかが、現在保育者養成の大きな課題となっていることが明らかとなった。この学生の考える力については栗原(1992)がいくつか挙げている。保育に必要な能力として、基礎的な知識と保育の実践の2つがあり、保育の実践については、「子どもの把握、理解」「指導計画の立案」「指導の実際」「保育の反省」の4つの観点から、観察力、分析力(発達の諸側面の把握)、発想力、統合力(総合力)、創造力、対応力(いわゆる臨機応変な対応)、評価力(自己評価を含めて)、多様な価値観(他面的に捉える)を挙げた。

今回の調査結果とあわせて考えてみると、幼児の理解に関していえば、観察力や分析力という大きな能力の枠組みだけではなく、観察する際の視点の置き方や分析するための枠組みなどを大学の授業の中に提示しておく必要がある。どこに着目し、何をどのようにみていったらよいのか、単に子ども集団の規模によって分けるのではなく、それぞれの視点が必要となってくると思われる。

同様に、指導の理解に関しても、教師の言語的な教示や行動面での援助、表情や環境構成などを細分化して、学生に理解させる必要性を感じた。

今回の調査で学生の自己評価が低かった「指導計画の立案」については示唆を受けることが多かった。指導計画の立案に関する授業科目は大学のカリキュラムの中にいくつも用意されて

いるが、これらの中でなんども重複して経験することが必要であると感じた。

指導の実際については、実習中に幼稚園訪問を行いたい半日かけて参観している実感として、この自己評価はだいぶ甘いのではないかという感想を持った。学生自身は一生懸命保育をしているが、そのために子どもたちの待ち時間が多くなったり、子どもが目に入らず、学生一人がからまわりしているという状況もあった。学生は失敗を回避しようという傾向が強くなってきており、指導の実際に関しては失敗しなかったからということから高い評価へとなっていることも考えられる。失敗から学ぶという部分も学生へ強調していかなければならない点だと思う。

以上のように、今回の調査からいくつかのことが明らかになった。その一つとして学生に必要な能力を大きく捉えるのではなく、その能力を獲得させるための視点や枠組みを細かに設定して与えていく必要がある。また学生の学習内容の確認と定着させていくための重複性の確保や学生個々の学びとその発展をサポートするための個別指導の必要性もある。更に今後求められる保育者の役割に関する分析と指導の仕方についての検討。これらのことを行っていくためには、幼児教育の専門科目の構造化をめざして、担当者の相互連携が必要になってくるとともに、学生個々の学びを把握することも重要な課題となってくると考える。

<参考文献>

- ・ 亀谷純雄・栗原泰子・野尻裕子他『幼稚園教育実習・保育実習マニュアル』文化書房博文社 1997
- ・ 近藤充夫・栗原泰子「保育者養成における『指導法』の研究—保育者にとって考える力とは—」日本保育学会『保育学研究』1992
- ・ 栗原泰子・野尻裕子「幼稚園教育実習における自己評価について」日本乳幼児教育学会第11回大会発表論文集2001
- ・ 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 1999
- ・ 野尻裕子・栗原泰子「幼稚園教育実習における学習内容について—自己評価の具体的内容から学生の学びを検討する—」日本乳幼児教育学会 第11回大会発表論文集 2001